

大小島真木「森の中で／In the forest」

木を見てその内に森を見る

小金沢智



* 森の中で / in the forest *
exhibition view

の四季の連作のごとく一体となり、人型をなして「山の子」とはその男性とも女性ともつかない子どもことだろう。天井部分からは映像がパネルに向かって投射され、私たち見るものに問いかけを行うというものがある。パネルの作品の鮮やかな色彩と細やかな描写、そして壁面への鉛筆によるモノクロームのドロ잉と対比の際立ちはもとより、そこに描かれている内容に惹かれ、しばらくの間眺めていた。表わされていたのは、生きとし生けるものとそれらが住まう自然に対する畏敬の念が多分にこめられた作家の眼差しであって、その眼差しを反映するような「山の子」の目から自分のそれを逸らすことができなかったのである。

西武渋谷オルタナティブスペースでの個展「森の中で／In the forest」もまた、壁画であるという点で MA2 Gallery での作品と近い関係性がある。「山の子に問いかけられる」と同様、大小島はパネルの作品を起点として、描写内容をそのまま拡張させるようなドロ잉を今回は公開制作によって壁面にほどこしていったのである。

大小島真木（おおこじま・まき／1987）という、発声したときの響きだけではなくその名前の語感も一度目にすれば強い印象として残る若い作家のことは知ったのは、MA2 Gallery でのグループ展「私の場所 私たちの風景」（2012年）のときだった。階段で二階に上

がり壁面に目をやると、一面が、パネルの作品数点と、それらに描かれている内容を延長するようなドロ잉で構成されている。「山の子に問いかけられる」（2012年）と名づけられたその作品は、山々とそこに生きているのであろう動植物がジュゼッペ・アルチンボルド

り、それこそが作品を魅力的なものにしている。そのとき百貨店の一隅に設けられたスペースは、絵画によってそれ以上の広がりを持つことになった。

一度作家に、学生の時からこのようなテーマで作品を描いているのかと問いかけたことがある。そのとき不思議な顔をされたことが忘れられないのだが、それは、大小島はこのような絵を描くということが既に血肉化しているのだろう。すなわち、この生きる世界の広さと深さに描くことによって潜っていくこと。その結果としての絵から、これ

からも目が離せそうにない。

興味深かったのは、個展のタイトルにあるように「森の中」らしきものが描かれたパネルの作品三点を中心に紡がれていったのが、それらをまるで一部として内包した巨大な「木」であったという点である。つまり、大小島はよりスケールの大きな描写を周辺に行なうことによって、「森」の中にある「木」ではなく、

むしろそれが逆転した「木」の中に「森」があるとも言えるような入れ子の構造をそこに作り出した。パネルの作品自体きわめて細やかで濃密な世界が描かれていくにもかかわらず、周辺のドロ잉によって、それもまたある世界のきわめて一部であるということが露になっ

ているのである。「木を見て森を見ず」という諺があるが、その作品はさながら「木を見てその内に森を見る」とも言えるものだった。大小島の作品は細部を掬いとる丁寧な眼差しによって成立しているところがあるが、一方でそれを巨視的に俯瞰する目もまた作家は同時に備えてお



アファンルパロの森
2012年
パネルに紙、鉛筆、アクリル、壁にドロ잉



山の子に問いかけられる
Installation view
パネルに紙、鉛筆、アクリル、壁にドロ잉、一部映像を投影
* 私の場所 私たちの風景 * MA2 Gallery

西武渋谷 オルタナティブスペース
8月7日 ↓ 8月26日

こがねざわ・さとし 日本近現代美術史研究者・世田谷美術館学芸員